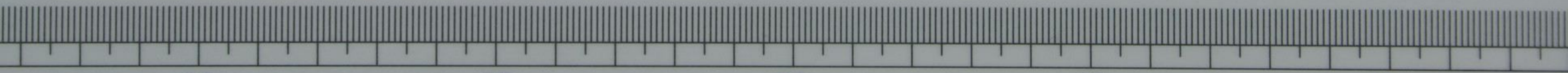




李寄  
 註解  
 改正月令博物筌  
 四月部  
 一

三又  
 529  
 5



10

15

20

25

30

詩歌連狂  
季寄註解

改正月令  
博物筌  
夏之部

四月部目錄

△印ハ俳諧の  
季と扱ひ

養生の法。風雨の吹欠。米の豊  
凶。妙法其外人家重法のてい  
ゝゝゝあるゆへ月令ハハハハ

四月

卦 月支 調子  
陰陽生 巽名 四丁

立夏節

三丁 △小満中 四丁

日令

此部ハ四月日の定リ  
て支の定リてを記す

更衣

△襦 △夏衣 △短衣  
△袴 △夏衣 △短衣 △袴  
△袴 △夏衣 △短衣 △袴

青簾

四丁 女衣服 四丁

主水司始供承

△孟夏旬 △扇拜  
四丁

風炉の茶

△貴船神事 五丁

筑摩祭

△山嶺日使 五丁

稻荷祭

△大神祭 六丁

八瀬祭

△久世祭 △山科祭  
四丁

多賀祭

△平野祭 六丁

四月 目録

申中	子中	日九	日八	日七	亥上	甲上
△菅宮祭 九丁	△近江幡祭 九丁	△土塔会 八丁	△地土祭 八丁	△磯崎天王祭 七丁	△大津祭 六丁	△當宗祭 六丁
△日向賀茂詣 九丁	△御蔭祭 九丁	△千間祭 八丁	△神衣祭 八丁	△大峯上山 七丁	△廣瀬祭 七丁	△水屋能 六丁
		△夏入 八丁		△龍田祭 七丁		△梅宮祭 六丁
				△龍田祭 七丁		△表本祭 六丁

西中

△岩神祭 甲午	△賀茂祭 九丁	△御形日 九丁	△管笠權 九丁	△中山祭 十丁
△坂本山玉祭 九丁	△葵祭 九丁	△葵桂 九丁	△さか祭 十丁	

東照宮御祭 和歌祭 十丁

△高野花供 十丁

月令 此部は四月一ヶ月日の定まらざるに依りて

△神祭 十丁

△榊取 十丁

△茶誥 十丁

△矢教 十丁

時令 此部は四月の時候

△首夏 十三  
△清和天 十三  
△梅花 十三

△外花朽 十三  
△新暖 十三

△短夜 十三  
△長日 十三

○時衣 十三  
△卯の花衣 十三

草木 世部より四月一ヶ月のころ  
木のふくらみありきりり

△餘花 十三  
△桐の花 十三

△檀の花 十三  
△枳花 十三

△実柑花 十三  
△棋子花 十三

△乳柑花 十三  
△橙花 十三

△柚花 十三  
△金柑花 十三

△宝洲栲花 十三  
△佛手柑花 十三

△橘 十三  
△厚朴花 十三

△秦椒花 十三  
△梭桐花 十三

△柳花 十三  
△榎花 十三

○槐花 十三  
△外花 十三

△藪椿 十三  
△牡丹 十三

△紅牡丹 十三  
△白牡丹 十三

△芍薬 十三  
△芍薬 十三

△杜若 十三  
△知母花 十三

△一八花 十三  
△玉蕊花 十三

△覆盆子 十三  
△阿片 十三

△芥子花 十三  
△阿片 十三

△躍草 十三  
△白丁花 十三

○風落艸 十三  
△梅蕙艸 十三

○玉不留行 十三  
△羊蹄花 十三

○車前山花 十三  
△文字草 十三

△吳光中花 十三  
△山苜花 十三

△風車花 十三  
△繡毬花 十三

△岩梨	廿四	△石藤	廿四
△宝鐸花	廿四	△鴨足中花	廿四
△夏枯艸	廿四	△茨花	廿四
△千日紅	廿四	△青木花	廿四
△要花	廿五	△盧陀草	廿五
△新樹	廿五	△若葉	廿五
△木草茂	廿五	△木下園	廿五
△葉楊	廿六	△若楓	廿六
△栢若葉	廿六	△常盤木落葉	廿六
△新茶	廿六	△刀豆花	廿六
△葵中	廿六	△紫蘭花	廿七
△茶挽中	廿七	△玉卷葛	廿七
△玉卷芭蕉	廿七	△蓮浮葉	廿七
△根都古中	廿八	△猪殃々	廿八

△梅葉 廿八  
△麥秋 廿八

△麦秋凡 廿八  
△青麦 廿八

△麦刈 廿九  
△麦莖葉 廿九

△蓮のそゑ 廿九  
△竹の子 廿九

△篠筍 卅  
△栢実 卅

△綿蒔 卅  
△美人艸 卅

**生類** 此部は四月一ヶ月の  
いそりのとありむい

△郭公 卅  
△子規△不如帰△おの田長  
△初農鳥△こさく△時鳥 卅

△待郭公 卅  
△初聞郭公 卅

△郭公一声 卅  
△夜郭公 卅

△雨中郭公 卅  
△名所郭公 卅

△諫鼓鳥 卅  
△葭原雀 卅

△老鶯 卅  
△鶯付子 卅

△鷹鳥埒入 卅  
△飛蛾 卅

△蝙蝠	此部	△蚯蚓出	此部
△蜘蛛の子	此部	△蚕眉	此部
△枝蛙	此部	△鹿袋角	此部
△蟬の子	此部	△初鯉	此部
△生節	此部	△鯉	此部

**必用** 此部は雨風の占の破置

の向方の日よりけしは。他行の心得。作事の吉凶。料理執事。會物のより。等其外。まきく。あつ。日の定まり。く。事ハロの日令の部。あり。此部。日。の。事。は。四月。一。月の。事。と。あつ。は。

四月 目錄終

月令博物全夏之部發端



**夏東** 漢書律歷志曰夏則火王。其精天。在温暖乃

氣百木を養い。生じ。又。夏。假。物。假。大。は。て。宜。平。と。い。ふ。音。の。下。略。や。う。さ。あ。と。音。通。と。い。ふ。轉。

○方。南。ら。六。後。漢。書。天。文。志。曰。日。南。陸。を。行。と。夏。し。つ。と。見。え。と。り。○夏。日。月。東。南。の。赤。道。を。行。く。を。南。陸。と。い。ふ。易。統。通。四。十。出。と。り。

○糞を朱雀とら南方火をまき  
よみ其禽は朱雀とら

○人の禮との周礼の注疏は白踐て身  
行ふと履といふ履は礼とら人の事  
を得るなり礼法身備て見事なり  
てあやうとら○天を昊天とら爾雅

は曰夏と昊天とら孔安國の云元  
氣廣大とらとら陽氣さうん  
して草木生とらとら○卦  
離とら人取とら和順とらとら

離と附と訓と別とらとら  
より又はく心を生とら親と寄と  
とら○氣は陽とら管子は曰其時  
を夏と云其氣を陽とらとら

の詳なり○臟は心とら人身の心乃  
臟と陽と主とらとら火に屬  
夏は配當とら故は火藏とら○色  
は赤とら説文は曰南方の色とら易

號は太亦とら其盛とらとら陽乃  
色とらとら○味は苦とら書洪  
範は炎上苦を作とらとら苦味  
火に屬とらとら

夏異名 ○朱明 ○朱夏 ○炎夏  
○炎節 ○光明 ○長夏  
○昊天 ○南陸 ○炎帝 ○祝融  
○仲呂 ○丙丁 ○執衡 ○南訛

○暑節 ○正陽 ○假宣 ○長養  
○氣陽 ○炎霽 ○奇峯 ○南爲  
和 ○かひとら雲御抄かてとらひく同上  
名 ○あめし 神中抄はとらとら註は夏

夏異名註 ○朱明とら陽色なりとら  
くとも明らとらとら  
○朱夏 ○炎夏 ○炎節 ○光明  
つとも朱明とらとら同ト ○長夏

とら物とらとら長とらとら  
仲呂とら陽散とらとら外とらとら陰  
實とら中とらとら旅陽功とらとら  
少とら仲呂とらとら○丙丁とら禮記

其日ハ丙丁ハ炳とら萬物皆炳  
然とらとら著見とら強大とらとら執

衡と南方の神炎帝離ふ来り  
 衡を執り夏と司く南方の南  
 訛と訛化まり南方陽氣に  
 いういく万物生くくくくく  
 ○正陽と陽氣たしこ時節と  
 けし事あり。假宜と假大と  
 けおと物長大のびとく。長  
 養と万物生長とる月とる云  
 ○氣陽と陽氣此月は充滿とる  
 ちり。炎帝と陽氣なりた  
 くのうらなり。奇峯と夏山  
 け雲の出るなり又夏の雲のけ  
 け山の形は似たり。南方  
 と南方の陽氣を以て物のなり  
 け事と炎帝。祝融。昊天  
 け事も註り夏の由来の所なり  
**はやちん** 夏の朝。秘蔵抄  
 けちんの元のい  
 といけてあての向かもの物なり  
 ○右の外三夏ふりる物の別ふ部有

### 四月之部

△此印あり能  
借の季と持りの之

此月純陽の月

此月純陽の月  
 保養して  
 發池とて  
 卦の乾为天  
 とて乾陽  
 のつた卦之故  
 天位とる之けしるの卦之



### 異名

△首夏△孟夏△初夏△新夏  
 △早夏△立夏△之月△余月

○槐夏。清和。△麥秋。六陽  
 ○純陽。正陽之月△仲呂△外月  
 △得鴻羽の月△花殘月△夏初月  
 ○これんころ月△そのをる月

### 異名註

△首夏△孟夏△初夏の  
 づもはけの夏と云夏之

○新夏いめしき夏と云て○早  
 夏いふは夏と云る○立夏の四月の





暈あまの洪水あり晴まの早リ  
 ○雨降まの五穀ふよる ○今夜  
 月を九参星東のあまの山田半  
 収南のあまの早北のあまの大風  
 人病む ○雲の大さ車或ひの笠  
 ねと見ゆるあまの時いよる  
 陽水の氣あり暑小至て水小湯  
 とべ ○東風あまを疫病の難る



○風の定まらうる時いよる  
 空りて一方へ風とてるるべし

**中** 七十二候の艸木七十二候。昼夜  
 長短。日出等隣左記を



四月節  
 十六日  
 小満  
 萬物  
 次  
 弟  
 義  
 苦菜の茶の事之此頃茶と  
 つと取之。麻草のるるの類冬  
 水より生じ草の惣名之夏の  
 火氣よあてかりぞ。秋の稻  
 豆その外物の收る時るれは夏の  
 此月かり納るを秋とつとぞ

○木香上外。杜鵑啼。茶醸  
 香夢此皆小満の頃さる或啼ん

**天氣** 小満の日と夜生日と晴  
 天なきは麥大いふ熟と

**日令** 四月日の定りたる事支  
 の定りたる事とあるす

朔日 天氣 今日朝日の出る所  
東に雲多く西晴

たるハ月中天氣は日ハ暈あ  
るハ今月中雨多し大風吹

けハ米價貴し西北の風吹  
ハ飢饉とらるるハ凡大風雨す

是ハ秋大水あり小雨風す  
秋の水もふり晴は早し

○今日雨すハ豊年二日小雨  
ふさハ水多し三日の雨ハ早し

更衣

△裕△綿拔△郊の花衣  
△赤つ衣△橘衣△赤衣

△白襲又白重△香く△白刺  
○更衣の時の服襲裏表共ふ

白し綾或ハ平絹白くかき禁中  
の御装束今日より改ま御帳の

かびらとよしハ胡粉を  
繪とあそみあり○着服を

かゆる故更衣とす今日より綿  
入とウテあつせぬとらるる

女衣服

衣裳の色は定む  
々々より八月中頃迄

平帯といふハ前をむとむい  
たるはえ○昔ハ民家にて今日より

足袋とともむりしとあり禁中  
院方の女臈ハ四季よりふめを

新古今 前大僧正慈圓

ありとて花の塩をたきぬ  
しつととやとたえぬとらるる

夫木 俊成

まふれを衣うへてふうのり  
うらまかきもあつたひ

同 田舎更衣 仲正

ちのれをまぶのあつたねと  
めこぬるこもんやとけき

詞 夏衣花深まふり神かたり  
ひふの春のあみ蚊のねとらるる

ぬさうあつたのたまひハ夜のた  
る衣とたかりか衣花衣

衣子のいふハあつた  
衣ハ形ハ衣衣履の袴袴

連 山ひちのそむろこさうや夜宗祇  
非 いてる殺をた初あう蟬夜 芭蕉

大酒をよめて物うさこ裕る其角  
初裕とくに扇ぬぐ大工部 移竹

誰もくみちりのせの表初部 立圃  
たはりのもかるさふうつる夜 十摩

長持もまかまじりるも久 西鶴  
一日て花ふくまき裕う那 鬼貫

夜久新巾一つ出来はかり 之道  
狂ぬこそくふくふくもくもくや

ねんろくの楷ねりして入安  
夏衣のたふくを裕とぬうてい

魚の腹りや外おるるらん 貞徳  
音葉簾とも云今日より

春日簾 聖新に御簾子又  
續拾遺 土御門院

ひまをえていそかきせんかをれ  
々々うりかろあろあろとを

非 天候は後ろと次まき度 嵐雪  
樹をたて内を流しきま度 虚白

主水司始供水 四月朔日  
天子水と奉るなり 延喜式に出る

孟夏旬 夏季の改る始小臣  
御酒とたび扇と頒ら 始ふゆへ

年中行事哥合 殿中將  
法人のけくあ神ふかうあろり

風爐の茶 三月廿日  
嫁入を鍋をかづひて神事小出再い

京 近江 筑摩祭 鍋祭  
も云此里の女

数程鍋とろさ茶 或は初  
りらる

非 様よりて福かきさるあふふ 愚直

二京 調子村祭 山崎の近所  
日 圓明寺小倉大明神祭 能

三天氣 今日天氣晴まは夏  
中風雨順めで五

穀豊年也たまによつて  
米と商ハ輩四が三と唱ふ

禁忌 此日一切の血を  
見ること公にいむ 京 山崎日使  
山崎離

官の社人行列と八幡参る 俗に長者  
形にいへ

○宇治黄檗開山隱元禪師忌

近江 山王神御出夜半頃大津四  
の宮へ御出是山王のまゝに

祭の日神幸のまゝ大津より  
大宮の拜殿ふりへ入せ奉る

上京 △稲荷祭此月外三つは  
中の外れ日へ 弘法大師

東寺造営の時稲と荷いなる  
翁不現一もみ神へ初午の所座

るうたうだ 是稲荷山鎮座  
の時大師其面容と自らまごみ

給ひて神事の最初祭とあり  
神典はひける面ことしり

大和 大神とい三輪の神あり  
大物主の神の所へ

我々の津代まさく人けりふも  
おほよの津のまろりありせけ

△住吉 卯の祭  
大坂



上京 △八瀬祭辰三ツあり  
中の辰日行りあり

上京 △山科祭○北山茂登岐明神  
祭△久世祭の巳とあり

近江 △多賀祭△堅田祭  
○三井寺早尾祭

上京 ○北山イカダ  
明神祭

西川田令 四ノ五

上京 平野祭 貞観年中 二年申將

申京 年中行事奇合 二位申將

大和 當麻 河内 祭 近江 祭

上京 松尾祭 貞観年中 負世

梅宮祭 橋氏の祖神あり 秀長

河内 祭 近江 祭

不成 天氣 今日雨降 南都

大坂 天王寺講堂 結夏 音樂

大和 廣瀨祭 音田祭 右兩社同日

五京 神足 祭 日 部修行十五日

七擬階奏 是日二月又列見とて六 位以下の藝能ある者

大坂 住吉八 今日法事あるは祭 賞會 日 ともひて出る

天氣 未の刻大風とまると昼雨あり 豊年之夜の雨の宜いはず

禁忌 遠行旅立とるは悪し 草木と切打とていむ

灌佛 佛生會 浴佛 佛の浴日 龍花會 唐の寺にて五香水を以て佛にゆめす

天武四年小風神とタツタツノ祭リ大忌 神とヒ豆野ふまらる日本紀に出たり 風水の難とのぞけ豊年といはる神へ

そ撰て式部兵部の二省より ひさしてまづる以上卿升達を 札に記し置きて今日持てまづる を大臣より取て奏聞せらるると

そ撰て式部兵部の二省より ひさしてまづる以上卿升達を 札に記し置きて今日持てまづる を大臣より取て奏聞せらるると

そ撰て式部兵部の二省より ひさしてまづる以上卿升達を 札に記し置きて今日持てまづる を大臣より取て奏聞せらるると

そ撰て式部兵部の二省より ひさしてまづる以上卿升達を 札に記し置きて今日持てまづる を大臣より取て奏聞せらるると

そ撰て式部兵部の二省より ひさしてまづる以上卿升達を 札に記し置きて今日持てまづる を大臣より取て奏聞せらるると

△花山堂△五香水△つじ仏奉ル

○五才六歩の釈迦の像と造り金乃

鉢の内へ金と衆僧法と修す是世尊

生より人時天竜産湯と奉一象こ

⑤年中行司 咲也夕月のそんてか人

まいたるう久しき法のとあわさ

⑥非麦飯と母またをて併生と其角

せろんの虫のやね法 左の等とせろんの柱

⑦とーこのく月八日の若日よ

あさけむのせいととも

京 山崎天王祭○大原 大坂 住

大嘗會○天王寺講堂佛生會午刻音祭

○同所太子堂結夏開關午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂

開帳 ○水無瀬祭○かいで

光立寺 南都 興福寺佛生會

大峯山 今日より始て上戸開

役行者この山の岩窟小金剛胎

九日 清水寺二十不成 晴天ハ

十日 天氣 晴天ハ豊年なり 諺云

日月對しててせの秋早なり

伊勢 △神衣祭 麻積連麻うもて

大和 △練供養中將姫の忌當麻寺

十五日 夏入 佛家ホて一夏九旬と云

禁足とると夏ホあつりつとつ夏

地は草繁茂し虫多く出来

京 五山東拂一山の衆徒と集め

禪師拂子と取て高座に登り

偈を説く諸禪師と問尋せしむ  
東山新熊野大般若轉讀修行人

江戸 小松川善導寺中將姫の筆  
阿弥陀の像用帳

大坂 天王寺法華會子の刻行ふ  
昔は天王寺七村より鉦と出

祭りゆり其時の移りぬ馬具  
面人形を村々社内かゝる有とん

天氣 雨ふれ豊年の暮時日  
月と見ふ相對しと照ら

せ秋野きり月のゆるく早  
くして雲は紅色をまけい大い

でうさり又月のゆるくこれ  
とくして白き雨とつささる

六京 安珍寺鬼子母神祭 三井  
と同一く今日修行と

江戸 杉妻稲 近江 三井寺  
荷祭礼 千團子祭

願ある者たんと千こらへ鬼子母  
神へまじりて参詣とてべりい  
くるまより千こらとてい

中子京 △吉田 向日明  
祭 辰 神祭

中夕近江ハ幡祭 蒲生郡八幡村在  
後世ニ至リ 移日杉山祭神石清水同

中午京 下賀茂 大坂 玉造稲  
御蔭祭 荷御出

近江 △菅宮祭 申 關白賀  
祭神三社

茂詣 御車之地下殿上人前驅之  
あづま持び駿河舞をど

の神事ありと公事根元ふ出より

申中加茂△國祭。加茂社ハ山城國の地皇  
日故今此祭ハ國の者祭るハ今絶た

る。此日の祭ハ内裏より祭らせ玉之

近江 坂本大王祭 非 活やむ  
うらむの取まら風鈴軒

中酉加茂祭 上加茂みいろち乃  
御神ノ下加茂の神躰

御祖の神なり△祭りとてより  
いへ此祭りよめふかき





今日人々葵のついでに  
ゆふ世俗葵祭といふ

御形日 御生とも昏今日加茂の  
神生とも一日あけ

葵柱 諸鬘とも云葵と柱と  
とさす故諸鬘といふ葵

静原より取来り柱は松の尾より  
伐り来り諸のかざりとん

菅笠檐 大なるさげ笠とさし  
荷ひまゝ行列あり

夫木 夫木と云ふよりたつは京あふま  
いとせりけり加茂の川を後京極

年中行事奇合 頃阿

神山のあふいを登てたがせり  
のころさうさうとさうけん

夫木 西行

どい車は形のあふいけんの  
あまりいよよとさうしとさう

神も嬉し。ほをさる葵葉  
みあまの川のわたりて社をす

ふりやる。葵さる。葵車。鏡  
車。物見。蓋 見物さる

連かきては母の夢の二を京牧  
て我を中より本町で祭るが去路

任かきまきくはけり神の祭  
みせも葵とさるかうで常盤巻

中 土焼 京 嵯峨祭  
日 祭 日 亥 中 京 是則愛

宕権現の祭祀より祭る神  
二座伊弉並尊一座 火産

二座伊弉並尊一座 火産

靈尊一座と云むうへ平安  
城鷹峯東又社ありと光

二天皇御宇天應元年秋の  
慶俊今の靈地まうり奉

ふるり神輿ハ山下清涼寺  
より出つ土人の女屋臺小て

舞ハ或々傘鉾を出ハ風流之  
中山祭神輿の冷泉院に

た子り石神これあり天喜  
元年四月よりより先その

官幣と奉らると云  
是中酉日まうり

### 東照宮御祭

日光山  
その外

諸国あつり紀州若山御祭殊小  
美麗△和歌祭△雑賀祭△

○南風ハ旱西北風ハ洪水  
東北風ハ水西南風ハ平さり

### 京

泉涌寺雲林院  
如法経會九日

高野花供 純州高野山を  
弘法大師の像の御

衣をさる是と花供といふ今高野  
金堂より學侶の僧薬師會を

修行し花を供まうり日と大師の  
御衣をかめり日と同日なる也とそ

伯耆 大山  
祭 八日 天休節  
不成就日

夏駒牽 小の月をいハ  
九日小行くる

天皇武徳殿より出御さり庭上  
小御馬とひさ渡と白馬の節

會のあつり此ハ来月騎射の  
馬射人をもつ御覽せり

向さり負觀の頃よりハ  
トせらる猶延喜式ふくハ  
北野御神事 音栢御供  
○新日吉祭 昔ハ日吉世ハ月

月令

此部ハ日の定まらぬ四月一ヶ月の事をさす

神祭

此月神事多ク一名をさすこれハ季にさる

齊刺

神祭せんとて松竹神をさす事あり

金葉

春の月のよき日にてあるはこれの候ともあり

神取

△神は是る祭乃をさす江次第委

三枝祭

卒川祭をいふとや三枝の花と酒樽あり

さう故より神祇令ハ夏の祭の所ハ載らる(註)年中行事書ハ道大綱書

あるは光之枝の花と(註)神乃ハまゝハ酒をさす

茶誥

宇治にて今月挽茶壺ハ此のあり上品と鷹の

凡といふ銘ハ極上と紀と拾叟袋ハ七壺ハはれとこの極上と中と

とあり其次なる茶の上と初むり中と中下と後むりと銘と是ハ此

袋ありてつらとて濃茶と用之ふちつらなる次なる茶ハ薄茶と用之

今月諸方ハ出るとも茶事ハ風炉の時節より炉と重どるによりて

此茶の口切ハとていの方にても九月より後ハとるあり

○弘仁六年江州志賀にて崇福寺永忠僧都茶と煎て奉る

やわれとも其時ハ日本ハ茶は皆唐茶なり建仁寺の采西

和尚宗ハ入て茶のさりと得たて明惠上人とて梅尾ハ裁

よりありはく日本ハひろまりよりそれより梅尾と茶山

とい裁所と深瀬と云て今あり

**煮酒** 京師是と酒煮といふ  
て酒肆やといふ

酒煮の祝いとついで

**矢數** △大矢數といふ云 洛東  
三十三間堂と此事

とるん弓の天下ととるん矢  
を通とことひうより四月

中旬ふ極まけり日のさるん  
とつてのゆんやうべ

**松前渡** 商人蝦夷松前渡  
冬春ハ寒氣強ク

渡りかへ故此頃渡り秋上るん  
非妻して松の前は雪等水

**時令** 此部は四月の時  
候はかる事とあらむ

**首夏** 四月の異名ありしや  
その只夏の初と云意

新古今 素性法師  
をくはともあぬ春もあつぬ

いとぬきとるあつぬもあ  
建保百首 定家

大井川うらぬおせのまき  
ならさけたりと衣やひき

新續古 首夏風 左大臣

吹風もやいとらんたのまの  
うをたたりけりあま

詞ちつた友のを氷はあけ  
みたりあまはつるこむろは

まのふはえりけりあまは  
あまはえりけりあまは

春の休とふ日かき夏の来る  
非竿とるも卯月のあまは

ひくくとあまののりあけ移竹  
狂言二月つのもあまは

夜敷とさふあまはつる  
詩 首夏五字對句

清和味換衣 風光夏葉初

ノドカニエテアツカラ  
ハナタラニカセアリ



野麦衣 あまのあはれ あひふ  
おろも あはれ あひぬき  
黄 あはれ

**草木**  
爰ふ四月一十月乃  
くさ木とあひむ

**餘花**  
のうらぐさ あはれ あひぬき  
△青葉花 殘花。春ふ  
あふて咲のころ花く

⑤ 新拾遺 内大臣  
別てのはあふとやゆ、春の

日較ふ花のさたけくうん  
家集 山餘花 雅有

くられたるまはれまふ山くげ乃  
まをふくづひまのひまふ

繞古今 殘花 俊頼  
揺ふあふあふくづひまのひまふ

死ててしもまはれあふま  
詞 枝ふすくまふ。あふまふま

あふまふまはれあふま  
あふまふまはれあふま

**桐花**  
桐。是皆桐の種類く

白桐。黄桐。紫桐。荷

**梧桐**  
桐ふ似て皮青く疎皮を  
日月の関と知るべし都

十三葉あり下よりかまて十三葉  
の中の小葉もまの其月関也鳳凰

乃栖此桐あり  
⑤ 寂蓮法師

百あや桐の指ふとむるの  
ふとせの外の色もかりし

⑤ 移小も咲てまはる桐花  
あふて咲のころ花く

**檀花**  
杜仲。思仙。木綿。あふ

若のむすあふまふまふま  
あふて咲のころ花く

**枳花**  
時珍曰葉の橙のまふ木  
橘のじ白花とひらく

⑤ 枳殼之詞 雍陶

澧水橋西小路斜 ホソイヨコ道  
川ツタヒニマ

日高猶未到君家 オタクへ行ツ  
カスガハツスギ

村園門巷多相似 ガイレヨノ同シ

處々春風松殼花 キコクノサイ多剪

蜜柑花 大和本草曰其花とハナ

柑子花 花柑子とも云

依て優り嬌き花柑子ハ慈田

乳柑花 久年母。花

柚花 樹葉皆橙似

柑花 雲州橘花

佛手柑花 実熟して人の手

橘 包橘。盧橘。軒生

どよ花。橘ハ柑類の惣名也

包橘 三方沙弥

橘のハカ むらさきのやう

新古今 通真

行末孤雅 むくも夕風

同 家隆朝臣

今昔 花咲そひるま

同 家集 風詠 盧橘香 清輔

若く代 花もささて吹風

同 夫木 閑居橘 光俊

同 夜盧橘 如願法師

同 里盧橘 隆祐

神の香かひうとあふひりて枝

星 樹の花をま くらあ 十二月

古里 杉塔 云月 雨

連橋 云々 云々 云々の凡 宗祇

俳 首句 云々 云々 云々の其 角

狂 陳皮 云々 云々 云々の 貞徳

詩 橘 五字 對句

楓 樹 隱 茅 屋 白 花 如 霰 雪

橋 林 繫 漁 舟 朱 實 似 懸 金

詩 全 七 字 對 句 詩 礎

銀 章 自 謁 人 臣 力 歲 寒 心

玉 液 誰 知 造 化 功 度 玉 岑

珠 顆 形 容 隨 日 長 處 々 紅

瓊 漿 氣 味 得 天 成 嘯 橋 林

厚 朴 花 葉 擲 の 葉 似 て 鋸

秦 椒 花 山 椒 も 似 て 味 似

櫻 欄 花 花 の 初 魚 の 孕 子

夫 木 為 家

胡 蝶 花 梢 ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ

非 掃 ぬ の ち 日 和 せ 櫻 欄 の 花 度



桜招の皮一年に二三次あるいは  
四度剥べし剥ぎぬはまて

長せざるゆへ皮を剥ぐ葉はあ  
所より剥初る葉の付る所

中いされば常か **栲花** 正字  
とふ時ありし **栲花** 柳

○栲花七の母あり一多壽二多  
陰三鳥の巢あり四虫く

と五霜葉玩比六実る七落  
葉まはして文字と吞べし右を

抹の七 **榎花** 非多あて多のた  
絶と云 **榎花** 中い果さ外曲齊

○夫木川端の岩の枝は赤とあひ  
らち杉人の衣ぬいさし 為家

**槐花** 今月花咲 **卯花** 槍の  
実い秋く **卯花** 花

名異 **白荊花** 錦帯花。空疏揚櫃  
花。志は足草。雪見草。初見中

夏雪中。垣見中。卯の花といふ  
つぎふるの中畧さる箱根うつ

ぎ十姉妹。花はうく △岩本う  
つぎ△里う川△三葉うつき

○新古今 白河院  
卯の花乃ひしうさける垣をい

きるれ月の新とどるふ  
卯の花咲ある耐い白く人乃

は 太宰大貳重家  
波りてゆさ垣のともてかる

夫木 後京極攝政  
里人のうのまからううけみ

かき雪とのむうととと  
家集 水辺卯花 西行

立田川うけまうれをこえりて  
おせぬのさまにまう卯乃を

家集 卯花似夕顔 匡房  
字は見えははくいほはと夕顔の

垣ひよまろくこけんうれを  
夫木 卯花似月 為家

久々の内ねけくをさあふ  
あつこのさうんさける卯の花

嘉祿百首 河卯花 為家

久々のあつきの河乃卯花を  
月々あつぬ々々々々

五社百首 暮見卯花 俊成

志どろひのうらみよしの遊風  
ほよよまよるうらみ卯の花

夫木 湊卯花 定家

かろこのゆめへいさふ風  
あまそそそむる者卯の花

夫木 舟路卯花 家隆

うねふりやまのたのしみ  
夜ををるふひよせこらん

明月 山卯花 敏定

休むれよらたひけとあつ  
うのむさけのゆめ

夫木 社卯花 定家

あまそそこのあつやう  
ゆめをまほくかふうのこ

鳥羽殿奇合 田家卯花 俊成

小山田のいさふふか  
あまそそこの花はあつ

夫木 卯花 定家

卯花のかきひのまふま  
いせわたりいせわたり

金葉 卯花連垣 匡房

あまそそこのあつやう  
垣根はくまはあつやう

千載 遠村卯花 政平

うねふりやまのたのしみ  
かろこのゆめへいさふ

後拾 山家卯花 通宗

後拾てあつやうのまふま  
我のこころとあつ卯の花

詞 卯花 白妙 雪 定家

あまそそこのあつやう  
の月よあつやうのまふま

川 卯花 野 定家

あまそそこのあつやう  
のまふまのあつやう

雨 卯花 時鳥 卯花

花のあつやうのまふま  
木陰木のあつやう

木陰木のあつやうのまふま

表の下りの垣あつた垣の。ふらりの垣の。卯の花垣。ういさ垣

連から言せてくれぬのさうり小宗砌  
卯の花ははくをさる垣や小宗春

卯の花ははくも腹つたういさ井蛙  
二月を一度はく卯の本は貞徳

狂卯の花は何もくもあつた白雪と  
まふ不審のまふ

たつらん貞徳  
數椿 貞の條 小妻

牡丹 異木草 魏花 韃紅 姚  
名紅姚 黄国色 天紅 魏

紫馬紅 裴白 鼠姑 紀羅 老紫  
葉庭紫 牛家黄 狀元紅 二日

草 深見草 名取草 富貴草  
△鑽草 △花王 ○とまり草

草庵 頌阿  
嘆中々うたはれそいふのゆゑとま  
さへでも人の花ふるるをみ

玉葉 愛牡丹 師兼

朝のあけそしる年もふうとま  
袖うらひあつたのさうり卯

詞 花のとり火はくふひもあ  
く。あ。た。さ。ま。あ。さ。あ。く

嘆 奇よの春と連作の夏さる  
非 多とまをむさうや北日表宗内

六もとらふふ牡丹の其角  
牡丹のさひあつたのさうり五後竹

げ家も是れとあへやんふ事吟  
狂 花の揺ゆいりやういさういさ

こらひあつたの夜は月うつく牡丹  
詩 牡丹五字對句

イタマカチヒングハイニニイカウヒラキキヨカウニ  
味嘗貧外見 異香聞玉合

スニチチウニヒキルケイニナグムギンニ  
不似地中生 輕粉泥銀盤

詩 今七字對句 詩礎

曉艶遠分金掌露 正開時

八十七ガカリ

暮香深若玉堂行 淺復深

群芬盡怯千般態 有此花

幾醉能銷一番紅 醉數杯

詩 牡丹之詞 唐 李太白

名花傾國兩相歡 常得君王

帶笑看 牡丹一名苞 傾國ノ

御氣ニ入ル故常ニ君王笑 解

秋春風無限恨 沉香亭北倚

闌干 此兩品ニムカハバドノヤウナ

詩 飲酒看牡丹 劉禹錫

今日花前飲 甘心醉數杯

但愁花有 蒼ヲナカステ終日 但愁花有

語不為老人開 上 蒼モノ云ハ

為ニハロハヒラクニジキトナリ

牡丹 錢思公カ説ニ白

花ヲ第下シ紫

花ハ其次ナリト云ヘリ今櫻ヲ

木ノ王トシ牡丹ヲ草ノ王トス

沉香亭 唐ノ明皇ノ牡丹

白牡丹 花潔白ニシテ愛

狂 低珠ト侍マハ依リシ花ガレト

詩 白牡丹之詞

長安豪富惜春殘 爭賞ハ

新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘

子テ賞翫スルゾ 別有玉盤

美露冷無人起 就月中看

丹ヲ白銀ノ盤ニ 見立テ作レリ

白牡丹

種類 三國。五重七重  
花びらあつくはやう

○あつ菊。五重大目ん。○白縮。六  
七重大目ん。○出雲。六七重中目ん  
○香久山。三重大目ん。○袖の雪。大  
目ん二重とこしうふこあう

紅牡丹

種類 深井。大目ん濃  
紅うらあざかさひ多

○筑前。中目ん色濃七八重いろ  
蠟紙ふへやわうふらふら。○志は  
凡大目ん薄紅より紙ふらふら  
とけとたる。○朝日山大目ん  
五六重丸咲。○見越。濃中目ん八重  
○妙覚寺。大目ん四五重。○廣沢。大  
目ん四五重。○握々。大目ん九重。○  
待夜。中目ん重より。○山里。大  
紫菊さた。○大紅。大目ん黒紅。○  
ちりしん。九すう。一尺まて。○吉紅  
中目ん五六重紅色より。○濱紅。  
大目ん多う。○小泉。色中紅を

花さたててこたうを  
きかたうあつあう

芍薬

異名 將離。花相。犁  
食。餘客。和名。あまひ

草。かよ州。秋根とて薬  
用とらるる

非芍薬の四子や葉の結露 立圃  
芍薬又骨折足ゆる時多引 移竹

狂咲うや牡丹と百合のちくは  
はあすあまの芍薬の花常樂菴

詩 芍薬五字對句

幸因親切地 孤賞白日暮

還遇艷陽時 暄風動揺頻

詩 芍薬之詞 唐韓愈

浩態狂香昔未逢 紅燈燦々

緑盤龍 昔シヨリカ、ル色香ノ風

カナル如ク葉ハ音竜ノ口タカニニ

似々 来獨對花情驚恐知

在儂宮第幾重ハナハ仙家ニテ

毛幾重ス

芍藥名花関守。血三重紅

○小夜雨。血三重隨分白○金孔雀。血二重や紅○白磁金。白三四

重○たつき。薄紅二重花中うん

白○錦木。血紅三重黄色金

杜若燕子花分やよ花分

○本邦久しく誤り来たり

杜若香草なり此花の正字馬

蘭本名坊実なり

○建久百首 定家

拾玉 杜若写水 慈鎮

山家百首 水田杜若 仲正

張り後山下あのかさの

しんえい條乃さか

○哥の部立ふたつと春小

とあり連俳よ夏より詞派

山下の襟衣。う衣。さく。

名所。後右。八橋。志賀。昆陽。

廣沢。池あり。世沢。花うむ

連あそびあり信一杜若宗春

俳葉まけぬ花る杜若其角

西の目や門控て好むあり信徳

狂あてさくふいのあやめつら

似さうや似さうといふふさう雄長老

手花といふさうとさうとさうと

一そいさうとさうと

信海法印

杜若名花

○鷲尾。さうとん中

門。うす黒。○橋姫。さうとん中

○濡鷺。さうとん中

○薄雲。さうとん中

むらぐらうらうら ○ハッ橋濃むらさ  
き花首又葉一枚つて出る莖一本  
小三返つ咲くもの肥るる花四  
五つても咲一番花二番花とつへ

知母花 青さ 一公の花 名異

紫羅草 鸞尾 和名余四謝と  
書マ花紫のて杜若ふ似る

覆盆子 種類 蛇母蓬菓  
○蕨○樹母△草

ご△ちらまのちらご△はらうらご△へま  
つらご△まいらご△て夏花さたもの

王孫花 異名長孫 芥子花

○名米囊花 ○豊粟花 ○象穀  
○御米 (俳) けーとさめとさ

らるあとの須弥 いくけい其  
色いこれあかあけけけ立圃

よりやあや合とるけー坊と宗且  
右行とよるまけけけけ納子

阿片 ○鴉片 ○阿芙蓉 ○阿片  
いけーの花の津液を

アミ粟栗青苞とむさぶとさ  
午後大なる針とりのて其外

の青皮とて裏面の硬皮を損す  
ることをい次の早朝津出ると作

カソこそげ収て汝器ふして陰  
乾めて用ゆ名方一粒金丹は是

を以て製とと尤 花葉 躍花 續断

久深の妙茶なり 花葉 白頂花

の月と生ど人笠を 花葉 白頂花

名づく花白く小に 花葉 梅蕙州

風露草花 花白梅 梅蕙州 花白

玉不留行花 ○金盞銀臺花  
俗ダん羊蹄花 ○和車

前草花

異名 牛遺。牛舌。車輪菜。花穂。

文字摺

○紙摺草ともかく本名いさごしひひくま

靈光草花

○鷹爪。花黄。畧。绿豆。似。実同。

山草花

白花。風車花。紫と帯ふ。

繡毬花

白花集咲。岩梨。三葉。

石藤

○五月つら。つら。花葉。紫藤。似。紫白の二種あり。

夏枯草

葉。花紫。

宝鐸花

花鈴。倒。垂。青。白色あり。

鴨足草

異名 鏡面草。耳草。花淡紅色。

茨花

○薔薇。牛棘。山棘。牛勒。実と營実と。

名つく野生の紅白二種あり。人家小栽るの形の形色数品あり。

哥六帖 秋のけさうひもそつるのさるさるあごさるのといへかうさう

千日紅

花の盛り久く。七百。日紅。藤。故。名づく。

青木花

花紫。黧色。美。葉常盤。

要花

扇骨木。正字未詳。小小白花とひく共。

樹最も堅硬して扇骨とをす。堪へり故に此名あり。

盧陀草

○普婆三礼草。近。世南蛮より來る。

新樹

樹の植物の總名。新葉の薄翠と云。

新古今

曾根好忠。花らしをの木は同じを合て。天照の月の影をいさる。

夫木

定家



常盤木

常盤木 常盤木 常盤木 常盤木 常盤木

玉葉 庭樹結葉 院

新續古 山新樹 左大臣

詞 詞 詞 詞 詞 詞 詞 詞 詞 詞

山の葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉

若葉 新樹 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉 若葉

非 非 非 非 非 非 非 非 非 非

わくろ葉 病葉 病葉 病葉 病葉 病葉 病葉 病葉 病葉 病葉

木草茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂 草木の繁茂

木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇 木下闇

葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻 葉櫻

若楓 若楓 若楓 若楓 若楓 若楓 若楓 若楓 若楓 若楓

夫木 夫木 夫木 夫木 夫木 夫木 夫木 夫木 夫木 夫木

柏若葉 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏 赤柏

常盤木落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉 冬葉の落葉

新茶 新製一古茶 新茶  
對七云

新茶 新製一古茶 新茶  
對七云

刀豆化 色淡紅(能)慈者ふ  
ふみく豆の心(羅州)

葵 二葉草。葵うつ。日吉草。折まの桂(酒の日加茂へ)

遺と加茂して葵はく。そのを  
りうつ。日吉草。日吉草の

土よて蕪葵といふ。山州加  
茂の山中(生)二葉の葵あり

面昔く裏紫色と帯。少く  
上よつ。桂の木(枝)つ

て簾及器。北山中村  
より。葵の種類(五月の外)は

新古今 小侍  
い。その山(の)みい

詞が葵(之)君(能)其(之)の  
か。桂女(白)後(車)翁(ま)の

狂ぬく。葵の上(至)や  
貞徳

非物怪。葵の植(慶)安  
野酌(勸)芳(酒)満(園)種(葵)藿

園蔬(烹)露(葵)遠(屋)樹(桑)榆  
詩 葵五字對句

詩 全七字對句 詩礎  
山中(習)靜(觀)朝(權)奈(蜀)葵

松下(清)齋(折)露(葵)祇(綠)多  
紫蘭花 花蘭(の)じ

紫又(白)あり  
兼(ひ)ろく(た)て(と)あり

詩 紫蘭五字對句  
押(軒)竹(氣)淨 拂(簾)蕙(風)涼

紫蘭五字對句  
カセニニムレラマク

詩 紫蘭五字對句  
カセニニムレラマク

詩 紫蘭五字對句  
カセニニムレラマク

茶挽草 雀麥 穂のり。燕麥

能 能く 玉卷葛 茶の葉 思貫

玉卷芭蕉 宗奩云新葉未開

蓮浮葉 水面浮き生るる云

卷葉 つるり 季は六月より

非 非入月まきの老葉のゆつこき

詩 卷荷之詞 唐韓偓

侵曉衆涼偶獨來不因魚躍

見萍開 曉涼氣ニサソワレ来

卷荷忽被微風觸瀉下清香露

一杯 フヨク風ニ卷キ葉ノ蓮ノフ

根都古草 針のやう細き

猪殃殃 葎花ともやぐ或々

梅葉 非 葉はさうて画

麥秋 秋ハ百穀成熟の期

麥秋風 麥小於てハ則ラ秋

家集 俊頼

能 能く 能化堂

能 能く 能化堂

能 能く 能化堂

能 能く 能化堂

能 能く 能化堂

河人もささげし人もけく人も  
ぬぐりたるかろくさるまふか 教二

青麥 青むすまふさひき  
きぬへまの圃 鬼光

麥刈 立春より百二十日して刈  
と旬を但小麦平日遅

麥藁笛 麥の莖より吹く笛  
と小児の戯き

○西行奥州小下河内人の童子小蓮  
お僧ハ何国へ行玉人と問ふ西行哥  
枕をさすをさるる行ゆると然る  
うはあの方ふふ多必辱と得玉  
又冬生夏枯る艸を哥とむ之僧も  
とみふやといふ西行艸の事頭并  
かて夫より引して洛へ帰るとと  
この所も西行のゆくり松と毒  
まろの樹今ふあうの草は麦  
之是塩竈の明神示現とといふ

詩 麥秋五字對句

川光淨麥隴 綠樹連村暗

日色明桑枝 黄花入麥明

詩 麥秋之詞 明申時行

光々秀色挺来牟片々黄雲

似水流 麥ノ色トリワケ秀クデク

雨添新漲乍 沉浮風雨ノ波ヲナ

龍濤生四月 秋麥秋豊饒

怪狂瀾頻起 陸漫教文偉賦

中愁 カニナニ  
起 ガゴトシ

蓮花 蓮若根順の和名抄  
小蓮の蕾 和名いぬ

哥多どい詠ぐらふらふらふら  
とを侍るく賤き身と塵灰と

人の思つる心より蓮泥より生じれば  
泥と戀よりそとてよそより奥伎抄  
和名抄等より泥くつくる字と  
こいちらく訓よりせん

筍 たけのこ 笋 異名 竹萌の初筍  
夫木 巨衝

親のこをむく此人のわらうと  
竹の子れちるいりし

能 笋の皆能師をれや東坡の画李吟  
竹れ子い寿の候より青なる久住  
老翁の省とかむ波う那 其角

狂 笋をそ 新發をそとるはて赤  
地付まはるいあまの竹の子れを保友  
詩 筍之詞 唐李商隱

嫩穠香苞初出林於陵論

價重如金 タケノコノ出カケニハ  
價ハナダ貴シ

皇都陸海應無數 忍 霜 凌

雲一寸心 都ニモ草山ニナルベレ  
前ヲシキモノナリ

採筍法 朝早く見て露の上ら  
ざるものをぬきとらべ露上る

月の大竹とさる 竹根ひらると  
止る法 隣よりさるゝ来り妨

とやう小海帯と多く埋め  
と此方へ生さるゝとさる

淡竹筍 四月 盛出 紫竹筍 味の淡  
竹も同一

美人艸 唐項王の婦人虞氏自死に其墓上  
生じたる艸有る今て美人艸と云ふ也

○右の外説多し一妻して八世六丁出  
能 さいせうの風の高や夏人竹 可申

篠筍 篠の小竹ありて俗に  
密と呼ぶものなり

類多し筍と皆篠子といふ  
哥 拾遺 道昭

今い我々もき老の坂こへて  
みよけりるもの下ら

櫻實

生い青く熟して赤黒  
妙養よく魚の毒とけ

非実桜

やぶやぶに生ひはたると温故  
是水

綿時

二月 櫻木の  
たひや桜の実 俟之 綿時

種植

豆 黒豆 大豆 移栽  
小豆 胡蘆 葡萄

石菖蒲

秋牡丹 枇杷 秋海棠  
桂 楓 杠 菊

挿木

沉下花 薔 柳 雁木  
芙蓉 木犀 柏 椿 等

収採

蜂蜜 稀 菱 紅花 蚕豆  
杏仁 桑の実 栗

生類

此部より四月一ヶ月の  
生々の派あり

郭公

異子規 杜鵑 杜宇 蜀魂  
望帝 不如婦 百舌鳥

王迎鳥

田歌鳥 早苗鳥 妻 鷓鴣鳥

田長

まての田長 無常鳥 夕影

鳥

蜻蛉 背鳥 勸農鳥 くらきり 時鳥

貞應百首

遠郭公 為家  
雀 聖いさくちやひらんやうききす

常盤井百首

朝郭公 仲正  
やうきききうきくしてまのえの

夫木

社頭郭公 大宮大政大臣  
このもろとあるはやろとやうい

夫木

人家時鳥 法印印宗  
お月まつまのよの星のやうやます

弘長百首

雲間子規 行家  
卵れむあうれ声さそみと

夫木

近圃郭公 俊成  
そらよりのれくこかろらん

同

野郭公 定家  
ありふもあふれあふの星よそそ

同

野郭公 定家  
かういあうれはゆきさひけ

美珠のなほ下流かほくは  
ゆきてやさうらむさうらむ

同 里子規 入道二品のこ

さうく作たまののり里は名を  
あまほくまきすまきそ

家集 山寺郭公 西行

時多さうらむさうらむね  
さうらのふいたうらむ

詞 和音和音。さうらう唱百料返  
おしりたまをふくまぐい志のひ絲

ひと声。妻向ふかうら。志のう。音  
位啼あす。さうらて。まのた

声。夢の白ひ。さうら。き。み  
ふさは。和音。さうら。み

さうら。里。さうら。里。み  
さうら。里。さうら。里。み

あまほく。海辺。松のね。み  
夜の泊ふ。海士の。み。み

に。國家の。夜。み。み  
る。美し。を。の。て。み。み

明の月ふ。美。さ。み。み  
は。れ。や。さ。朝。天。の。み。み

めく。ふ。は。本。の。め。み。み  
夕月。は。げ。ふ。さ。み。み

さうら。夕。の。さ。み。み  
美。人。待。音。さ。み。み

時。名。の。夜。待。み。み  
待。音。の。夜。の。み。み

ふ。さ。み。み  
美。の。さ。み。み

雲。さ。み。み  
る。名。の。さ。み。み

いつ。の。さ。み。み  
花。梅。の。さ。み。み

の花。の。さ。み。み  
菖蒲。の。さ。み。み

あ。や。め。の。さ。み。み  
の。枕。の。さ。み。み

う。ち。の。さ。み。み  
ら。の。枕。の。さ。み。み

ら。の。枕。の。さ。み。み

ら。の。枕。の。さ。み。み

むりともあぶ声。くさつてのまをば  
くれごとと向ふ。うんも啼。上はつた。

月 やくきぎの月 小多あり 雨 このひの  
かたの五の名跡を去る。むらさきのうら  
かく。八月はさちうらさくむらさきのりよ

早苗 いちねえ やくさつての民は農  
をすむる者にて。田不熟。なつて  
去ての田はことごとく。田苗うらむ

鶯 うぐいす この  
田はことごとく。鶯のうらむ。鶯のうらむ

傷 やぶ 内を  
なごめり。おののうらむ。傷のうらむ

懐 なごめり 懐のうらむ。懐のうらむ

連 つら 名もくまのうらむ。宗因

非 なごめり 非のうらむ。秀吉

け なごめり けのうらむ。清正

星 ほし 星のうらむ。其角

耳 みみ 耳のうらむ。宗因

思 おも 思のうらむ。思實

一 ひと 一のうらむ。陸舟

侍 まへ 侍のうらむ。和調

郭 かく 郭のうらむ。和調

公 こう 公のうらむ。和調

大 だい 大のうらむ。和調

抵 たい 抵のうらむ。和調

待 まち 待のうらむ。和調

伯 はく 伯のうらむ。和調

牙 が 牙のうらむ。和調

初 はつ 初のうらむ。和調

聽 き 聽のうらむ。和調

郭 かく 郭のうらむ。和調

公 こう 公のうらむ。和調

延 のび 延のうらむ。和調

文 ぶん 文のうらむ。和調

雅 みやび 雅のうらむ。和調

冬 ふゆ 冬のうらむ。和調



郭公声

是覚つるも心へ  
△白川殿 軌忠

何ぞとて一歩のふりかへりてか  
重なるりてふ遠ざかりきる

連 一声の見惚れし海やとくおちおち  
非 一歩や只も式の内きけ 伊當

狂 ちりまほそ居るまゝ地とやとち  
やとくく今の一と多 宗甫

夜郭公

月よとせても  
△続千載 高遠

まゝらまゝのささやわはは郭公  
こも夜ふくもかきこひてり

連 誰かゝるの卯は夜月夜殊とま  
月の中を文の夜のやとくき

非 焼味香とけけ小滝夜柱宇移竹  
詩 夜郭公詞 顧况

野人自愛山中宿 况是葛洪丹

青西 オクヤニラハコソハツ子ヲキイ  
タニレテカツニウレヨクノエ

庭前有箇長松樹 夜半子規

来上啼

コノタカイニツガニハニアルユ  
ヘニ夜ナカコロノホトキヌ

雨中郭公

多く五月雨とく  
△或の淋しき体  
ともしよかり

◎家集 雨中時鳥 顯季  
五月あふいままのさうけやとく  
とくいねまてはるもさうり

狂 雨の夜やを井のそこれ郭公  
りて経もふあり一あり 東陵

名所郭公

多々の詞の所は出  
△夫木 中務卿

あまぬさひひりのあはれやとく  
志のまよとくぬをやあいらん

非 けのふれおほ知まど郭公思貴  
狂 口お務とくさつ啼うやとく

かみの沈み郭公をうりて 英中  
○唐士の郭公のあくる夜至つて

あまぬさひひりのあはれやとく  
と欲す詩小作るも其趣なり

詩 郭公五字對句

杜宇呼名語渚頻行客薦

巴江學字流 山木杜鵑愁

詩 同七字對句 詩礎

花外子規燕子月 山岫連

水邊指衛浙江湖 杜鵑啼

望御墓下秦人去 顧雲霄

學射山中杜鵑哀 子規啼

詩 子規啼 韋應物

高林滴露夏夜清南山子規

啼一聲 夏茂之露ヒヤ、カナル晴

隣家孀婦抱子泣我獨

展轉何為情 時ニ感じ物ニ應ジ

展轉ノ愁ヲ催

不歸 蜀ノ望帝其臣下

ヲ讓リ亡ヒ去ル時ニ此トリ

啼故ニ蜀人ホト、キスノ啼

ヲ聞テ望帝ヲ悲ム其鳴

ト不如婦ト云カゴトレ

諫鼓鳥 布穀郭公の雌

葭原雀 中ノて

老鶯 亂鶯



あしんらふ高の玉ぞいれらる

詞のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

蜘蛛の糸のあしんらふ高の玉ぞいれらる

珠櫛魚奈何ケツカウナル

多キハレヨククニナリ縫隙容長

蜘蛛天下足巴蜀就中多唐元稹

踏虚空織横羅スコレノスキアライカ

紫纏傷竹柏啮噬及畏蛾木タケラメクリス

蚕眉眉と作る時とて云その

枝蛙木の枝に居て鳴く故に

鹿袋角鹿茸。春落て四月ふ生る角袋

蜻子異名 権劔。虎。蟻。蝻

初鯉鯉一名。松魚。肥満魚。

鯉釣餌を用ひずして牛の角

生節 鯉魚を四つにわけて煮し  
燻乾して脯となす

其いまこ堅硬きうさうりものと  
世俗よんでなまきりとつくり

**必用** 此部は四月要用の事  
又ハ天氣養生の法等と也

**日刻** 己の日の刻事と云は  
日さるるに用やうす月建く

**出行作事** 西の方に向ひては  
今月天道西不行整

**破** 夜九ツ 夜八ツ 夜七ツ  
未の方 申の方 酉の方

**軍** 朝六ツ 朝五ツ 昼四ツ  
戌の方 亥の方 子の方

**向** 昼九ツ 昼八ツ 昼七ツ  
丑の方 寅の方 卯の方

**方** 暮六ツ 夜五ツ 夜四ツ  
辰の方 巳の方 午の方

**樂事** 清和の天と云霞も  
霧もほして空の氣  
色翠ころけい〇更衣かつふん地  
より〇木々の葉若やうさうりの若

山吹も咲のとうさうの牡丹芍薬  
盛り富貴へ〇郭公の初声〇葵祭

**天氣** 曇りても北風強々い暗々  
西南の風ハ雨さる梅雨の前

西風統吹と云ふと云昼夜よく此  
風よて北国廻船来と〇今月勝有

ハ米麦後〇庚辰辛己ハ雨降ハ蝗  
後〇丙寅丁卯ハ雨降ハ米價貴

〇甲子庚申の日雷さハ禾小虫つ  
〇今月雨多々ハ春さハ夜ハ雨

多々ハ殊々  
麦と撒す **養生** 立夏の後甲子  
五日北斗辰己

建と此日乾く来ハ疾風暴雨  
當是ハ人と傷と急ハ虚邪賊風

とさう聖人これと矢石の如く避  
けやとさう委くハ内経に見さう

**四月用意之品** 左ノ品

海蘿子干 今月より乾  
ようりやと

海蘿子干

海蘿子干

七月七日まで干次とつくり  
季の夏ととるあり

**徴不出法** 天氣よれ時  
日よさして

どうれさるんか桐よい紙よ  
てとれまふ張よおそて梅  
雨のちこれとひけいけい  
つる奉さうれあり妙き  
衣服さくもかくれおく  
とれいかに生とるこは

**草木と伐法** この月諸  
木とさし

蛙とむてなし ○ 菖蒲  
の葉ありきとて撰てまの  
ころきうさふだー五月よ  
つうて能葉つるあり

**糊小虫はくさる法** 櫛の  
葉と

おむいぬありてサけい日数  
と経ても虫少しも生とど

**四月飲食并料理献立**

**料理**  
**汁** すすき 塩鳥  
もろこし ぶらな  
**清**

**汁** さぎ たの  
ごろ 子  
**鱈** あぢ  
あぢのこ

たの たい  
あぢ 見玉子  
あぢ ちんご  
あぢ ちんご

あぢ ちんご  
あぢ ちんご  
**差**

**味** まる  
あぢ  
**煮物**

焼あぢ ちんご  
竹の子 ちんご  
あぢ ちんご  
あぢ ちんご

あぢ ちんご  
**吸物** まる  
あぢ

あぢ ちんご  
**和會**

**物** いろ  
あぢ ちんご  
あぢ ちんご  
あぢ ちんご

精汁 丸いさ すすび 竹の子

進汁 丸いさ すすび 竹の子

贈 丸いさ すすび 竹の子

差味 丸いさ すすび 竹の子

煮物 丸いさ すすび 竹の子

和會物 丸いさ すすび 竹の子

時魚 丸いさ すすび 竹の子

鹽鳥賊 丸いさ すすび 竹の子

青物 丸いさ すすび 竹の子

海松 丸いさ すすび 竹の子

白うり 丸いさ すすび 竹の子

酒味替 丸いさ すすび 竹の子

貯竹筍 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

貯んと 丸いさ すすび 竹の子

とうとうぬま井の中へけりさげ  
 水際を敷く皮目と水氣  
 の入らぬやうにして置べし五月  
 上旬地笥の終りされ六月  
 中はくま 同法 皮を去り  
 少引撥き さいき処を  
 切捨二ツは割て筋の間は塩  
 を一をい入し桶をあぐべし  
 いく重もかき蓋して  
 再びとかあそくべし 又法  
 皮を去り熱湯をゆびさく  
 りて締めそくべしそ用時  
 白水をあうて用  
 色白くしてよ

茹久たぐ貯法たぐり 李なつびと桶  
 小入蓋して

河の瀬早さ処は埋め石とお  
 そくたけひそく盛しゆまそ  
 も生なまそよく持つ



